

# 平成19年度 富山市民感謝と誓いのつどい

と き：平成19年8月1日(水) 午後1時30分  
と ころ：富山国際会議場 メインホール  
(大手町フォーラム)



中学生作文最優秀賞

## 「富山大空襲体験談より」

富山市立新庄中学校 二年生

梅沢 静香

私の祖父は、富山大空襲を体験しました。私は祖父に、その体験を聞かせてもらいました。

祖父は家族で富山市の中心部に住んでいました。兄弟が七人いて、祖父は長男でした。富山大空襲が起こる前から、食べ物には苦しんでいたそうです。

そして、八月二十日午前十五分ごろに空襲警報が発令されました。祖父たちは、防空頭巾とヘルメットをかぶり、敷蒲団をおろして、田舎の方に向かって逃げました。逃げていた間に、上から焼夷弾が花火のように落ちてきました。祖父の後ろにいた人は焼夷弾が背中当たり亡くなりました。

祖父たちは、河原に逃げ込みました。そして、祖父の父が、どこに焼夷弾が落ちるか、命を失わずに助かりました。小学三年生だった祖

り富山大空襲にあつてからのような生活の中で毎日こう思っていたそうです。「なんでもいから食べ物とたくさん食べたい。」そしてこの体験を通して今も、一日日を大切に生きようと頑張っているそうです。

私は祖父の話聞き、絶対に戦争はしてはいけないことだと強く思いました。この空襲により、富山だけでも約二千七百人の人が亡くなっています。こんなにも多くの人が犠牲になつてしまうのは、大変つらいことです。

しかし、祖父はこの戦争のおかげで今があると言てもおかしくないと語っています。亡くなった人への深い気持ち、自分達が苦しい思いをしたからこそ、平和を守つていられるのだと思つていそうです。これからも絶対戦争はせずに、平和な富山であつてほしいです。そして私も、一日一日を大切に生きていきたいです。この空襲で亡くなった人たちの思いを無駄にせず、受け継いでいきたいと思つています。

小学生絵画最優秀賞

3・4年生の部



「楽しさいっぱい」  
富山市立大久保小学校 3年2組 村上 藍子 さんの作品

5・6年生の部



「第二の富山市ようこそ」  
富山市立堀川南小学校 6年3組 福山 拓実 さんの作品

### 富山市のあゆみ展

#### 巡回展

##### 日時・場所

8月2日(木)～8月9日(木)

午前10時～午後9時(4日、5日は午前9時～午後9時)

アピタ富山東店

##### 内容

市内7地域の歴史、観光行事等の紹介や、市民生活の変遷を写真等のパネルで展示するほか、小学生が描く絵画「未来の富山市」も展示します。

8月10日(金)～8月16日(木)

午前10時～午後9時

ファボーレ

### 主催／富山市民感謝と誓いのつどい実行委員会・富山市

富山市自治振興連絡協議会  
富山市長寿会連合会  
富山市女性団体等連絡協議会  
富山市青年団協議会  
富山市中学校長会

富山市社会福祉協議会  
富山市民生委員児童委員協議会  
富山市婦人会  
富山市PTA連絡協議会

富山市遺族会  
富山市児童クラブ連絡協議会  
富山市母親クラブ連絡協議会  
富山市小学校長会



# 「忘れはしない祖父の死」

富山県二俣新 横井 敏明

「横井さん！爺ちゃんおるがだろ。早く避難しられ」玄関から大きな声が聞こえる。「御苦労様です」母の返事もひときわ大きく、その母の後から私は玄関に出た。町内(相生町)の消防団の人が、メガホンを手立てしていた。

「長柄町が焼夷弾で燃え、町内の人おおかた逃げた。お父さん軍隊だろ？」忘れはしない。あのB29爆撃機による富山大空襲、昭和二十年八月二日未明の出来事である。

父は国土防衛隊に入隊して不在、家と祖父と母と私の三人で守るという状況下にあった。このころは夜毎の空襲警報に、やや慣れっこになっていたが、幾日か前に米軍機からばらまかれたビラで、空襲の近いことを覚悟していた。祖父は平素から、こんな年だし空襲になってもどこへも行かないというのが口癖で、祖母にのみ疎開するよう促していた。そんなことで祖母は、二、三日前に家を後にしている。

母は中学二年の私を頼りないと思つてか、私に目を注いだまま、「敏明、祖父ちゃんの手を引いて家を出て」。そう命令調でいつてせき立てる。いつでも直ぐに避難できる態勢は整えていた。夏服、冬服の両方を着、足にゲートルを巻き、学校の鞆は枕元に置き、長靴を履くという出で立ちである。渋る祖父の手を引きながら、片方の手に夏布団一枚を持って、玄関を出た。

「敏明、あんなに長柄町が燃えては神通川無理だね」

母は迷った揚句、私に相談するようにいう。「ね、小学校(西田地方小学校)へ行こう。防空壕があるから」

うなずく母と小走り気味に歩きます。辛そうな祖父を気遣い、時には立ち止まりながら、小学校裏口からグラウンドへ出る。辺りは嵐の前の静けさであろうか、不気味な静寂が暗がりの中で危機感をおおる。ときどき、稲妻に似た光が夜空に輝きグラウンドを照らすすが、その度に校舎が目の前に迫るように映る。

やつと目的の場所である奉安殿右側の防空壕(屋根のあるもの)に入るが、近所の人四、五人避難している。

「これからどうなるかね」

お互い不安そうに言葉を交わす。壕内の暑さに初めの間は耐えていたが、とうとう我慢できず、母の袖口を引っ張る。

「母ちゃん、ここを出て師範校(富山師範学校)へ行こう」

戸惑い気味の母は、「あんた方どうするがけ」。誰に訊くともなく話し掛けると、二人が壕内の方が安全だという。私はその言葉に、反射的により強く母の袖口を引っ張り、祖父の体を押すようにして外へ出た。

様相は先程と変している。校舎のあちこちから火の手が上がリ、グラウンド二帯はもやのように煙が立ち込め、その状況に足がすくむ。しかし、逃げようと自分に言い聞かせて、数歩も歩いたであろうか、祖父は奉安殿の前で足を止める。

「もう歩けん。その防空壕(奉安殿左側の屋根の無いもの)に入るから、お前ら行け」。私の手を振りほどき、防空壕でしゃがみ込むようにした。

「母ちゃん、どうする？」。熱風と煙の中を返す言葉に窮した母は、ただぼう然と立ちすくむ。

その時、天の助けか、一人の兵隊さんが近付いて来た。母はとどきに、「その防空壕に独り祖父ちゃんが、頼みます」「祖父ちゃん、行くちゃ、行くちゃ」。

私は持つていた布団を祖父に掛けてその場から離れる。小学校正門前の道路に出ると、上空からぱつと光りながら、雨がざあつと激しく降るような音を立てて焼夷弾が落ちてくる。それを避けるように背中を丸め、裁判所横から師範学校前の川沿いまで一気に走り抜けた。逃げる人を見、叫ぶ声を聞き、ここまで来たことの安心感で、息つく。

大空に舞い上がった炎が、学校右側の田畑一帯に、所狭しと避難している人々の姿を映し出す。その一角の空地に、母とともに疲れた体を横たえた。私は赤く染まっていた夜空を、まんじりとしなまま見上げていると、「水、水が飲みたい」。悲痛な声の聞こえる方に顔を向ける。あ、小学校時代の先輩である。どうも逃げている途中両親と別れ別れになり、その後で焼夷弾をももにうけて瀕死の重傷とのこと、何ら治療のないまま明け方に息を引き取る。

夜明けとともに付近二帯が一望でき、師範学校はもとより市内方面は二面の焼け野原、母と無言のまま目を合わせ。祖父のことが頭から離れず、燃え続けている市街地をやるせない気持ちで見続けた。

ようやく下火になった昼下がりに、祖父を探しに行くことを母に話す。「まだ焼け跡は熱くて入れんかも」。母は心配顔に言う。

「とにかく、逃げて来た道を逆に戻ると、兵隊さんと別れた場所まで十分ほどだし、長靴に水を入れて気を付けて行くから」。「それなら気を付けられ。ただ敏明、祖母ちゃん

んが疎開した布瀬も焼けとるみたいで心配になるし、母ちゃんはそのつちへ行くから来てね」。母と私は、そんなことを言い合って立ち上がった。

まだ衰えない熱風に、真夏の太陽の照り返しのまぶしい中を、川沿いに歩きます。ところがその川沿いで、母子三人連れの無残な遺体を見て、思わず顔をそむける。祖父は無事であろうか、暮る不安が頭を横切る。一夜の空襲によつて、師範学校正門から通じるところどころ穴だらけになっている道路に、一面に散らばった燃え殻や焼けただれたトタン板などを、またぐようにして歩き、焼け崩れて瓦れきの山となつての煉瓦建てであった裁判所と、まだ木片がくすぶり続けている小学校を横目に見て、グラウンドへ足を踏み入れる。乾いてばさばさのグラウンドを、小走りで防空壕へ駆け寄った。

「あ、祖父ちゃん」

別れた時と同じしゃがみ込んだ状態で、黒焦げになつている祖父、私は二瞬息を詰め、その場に泣き伏した。

五十年前の記憶をたどつてのこの手記、ここ数日間夢見が悪い。昨年、祖父の五十回忌法要を済ませたことと、あつてはならない惨禍を手記として後世に託すことにした安堵感から、この哀しみの思い出を、私の脳裏から消し去りたい。



氷見市鳥尾海岸に漂着した富山大空襲の犠牲者を供養するため、現地に建立された慰霊像

# 式典

午後1時30分から

## 1. 富山市の紹介映像

## 2. 「永久の火」入場 とわ 奉持者 富山市立興南中学校3年生 5人

## 3. 国歌斉唱

## 4. 黙とう

## 5. あいさつ

富山市長 森 雅志

## 6. 朗 読

「私の戦争体験記」から  
「忘れはしない祖父の死」／横井 敏明  
朗 読／声のライブラリー友の会 八倉巻 暁美

## 7. 代表献花及び一般献花

## 8. 「永久の火」昇天 とわ

## 9. ステージ演奏

富山市立新庄中学校吹奏楽部  
曲目／マーチ「ブルスカイ」、交響的詩曲「走れメロス」ほか 指揮／三鍋 暢恵